
最弱な魔法使い

トウクロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱な魔法使い

【コード】

N6199Y

【作者名】

トウクロウ

【あらすじ】

魔法使いの名門に生まれたにも関わらず魔法が使えない。そんな少女の物語

決別と出会い（前書き）

新連載です。

二つが連載ものなんて……いけるか？
大丈夫だ。問題ない。

決別と出会い

あれは、確か8歳になった次の日だったと思う。詳しい日は覚えていないが、深夜だったはずだ。

私は、姫島家当主の肩書を持つ父
姫島ひめじま 弦鶴げんかくに呼び出されていた。

父は日頃から険しい表情をしていたが、今はその顔に深い皺を刻ませ、さらに。

「どうだ。魔法は使えるようになったか」

外見に伴う威厳のある低い声で、父は私に言葉を投げてきた。

姫島家。

優秀な魔法使いを数多く輩出し、先の戦争では常に前線で戦果を挙げている。国を支える十二家の一角であり、名門中の名門だ。

「い、いえ。まだ初級魔法も使えていません……」

私は父の鋭い視線に挫けそうになりながらも、ただ結果だけを述べる。

そう、私は魔法を使えなかった。

名門の家に生まれて、この事実は笑い話にもならない。魔法使いの性能は遺伝的なもので、優秀な魔法使いの子供ならば優秀でなけ

ればならない。この家にとって私は異常だった。兄や姉、弟や妹も魔法は使えるし、双子の妹も魔法を軽々と使える。いずれも才能を開花させていた。

私はと言うと、魔法が使えないために家に閉じ込められていた。朝起きた時から魔法を扱うための勉強、訓練をして、それで一日が終わる。物心ついた時からその生活だったので、外の世界の事など書物で集めた知識しか知らない。

私の言葉を聞いていた父は、その表情を失望の色に変えていった。

「……そうか。なら、この家を出ていかなければならない」

「……はい」

8歳までに魔法を使えないようであれば家を出る。私が6歳の時、父から告げられた言葉だった。

一般家庭ならまだしも、名門に産まれてこの様だ。私の存在を世間が認知すれば、叩かれるのは目に見えている。そうなれば、姫島家の立場は危うくなるだろう。十二家は実力が伴う家を選ばれるので、その地位を狙っている者も少なくない。そういう者は十二家の落ち度を探そうと躍起になっている。

「お前は、昔から頭だけは良かったからな。理解してくれと思うていたぞ」

父の言つとおり理解はしていた。父は軽蔑の視線をこちらに向けしており、厄介払いをしたいことは。

「さあ、この家から出て行け。金は渡しておこう」

お札が入っているのだろう。封筒を懐から出した父は、私にも触れるのも汚らわしいように封筒を投げる。魔法を使っているのか、その封筒は私の足元に落ちた。それを手に取って深く頭を下げる。

「……今まで、お世話になりました」

別に、悲しいとか辛いなどの感情はなかった。この家には私の居場所はなかったのだから、逆に少しすっきりした気分だ。

父はすでに私に興味はないのか、早々と部屋を出て行った。

私はこの家を出ていくとしよう。

裏口から外に出て、当てもなく歩き続ける。持っているのはお金だけだ。姫島家と知られてはいけないので、何かを持っていくのは禁止された。裏口から出たのも目立たないためだ。

雪が降っており、アスファルトの上に積もっていた。歩くたびにシャリと音が鳴り、靴の中を冷たくしていく。

高級住宅街を抜けて街に出た。人通りは少ないが、それでもこの時間では多いほうだろう。カップルと酔った大人をぽつぽつと見かける。比較的明るく、いくつかの店は営業中だとわかった。

そこで何か買えば良かったのだろう。しかし、どの店に入れば良いか分からなかったし、そもそもお金を使い方さえ知らなかった。

フラフラと体を動かしながら歩き続ける。すでに体力は限界だった。8歳が過ごすには気温が低すぎる。疲れと寒さにより思考判断は鈍り、自覚はなかったが家を追い出されたことにより、精神的にも疲弊をしていた。

自分がどこを歩いているのかも分からないし、足を動かしているのかも認識できない。焦点が合わず、目の前に何があるのかもわからない。

私は何もわからない。

微弱な衝撃と共に、肌を刺すような冷気を感じた。そうしてやっと視界が戻ってくる。どうやら私は倒れたらしい。

瞳に映ったのは少し汚れた雪だった。その雪が口に入ってくるが、それを吐き出す気力も残っていない。

もう、死ぬのかな。

漠然とそう思った。怖くはない。いや、恐怖を感じないほどに疲れていた。

急激な眠気が体を襲い、私は本能に従うように瞼を閉じようとする

る。

その時だった。

「ほう、日本でもこのような光景を目にするとは、この国も腐ったものだな」

凜とした声が鼓膜を震わした。声の主はどうやら私のすぐ傍にいるみたいだが、生憎眼球が動いてくれない。だが、瞼は再びゆくりと開いていく。

「ガキ、貴様は運が良い。この私に拾われるのだからな。感謝しろよ。ちなみ、私がこんな善意を出すのは機嫌が良い時だけだ。よく覚えておけ」

冷たくて鉛みたいに重かった体が、ふわりと浮いた。持ち上げたのだろう。お姫様抱っこされたと気付いたのは、もう少し後になつてからだ。

そして、“彼女”は私の顔を覗き込んできた。その顔は美しく、猫のように細い目が良く似合う。瞳は左右が違う色で、右が琥珀色、左が赤銅色だ。艶のある白銀の髪が私の顔にかかる。

「私の名前は黒沼格だ。くろぬめいたるガキ、貴様の名前を聞こう」

それが私

姫島奏とかなで“彼女”との出会いだつた。

決別と出会い（後書き）

小説を一人でも多くの人に読んでもらえたら嬉しいです。
感想や誤字の指摘などもよろしくお願いします。

きつかけと結果（前書き）

文章がしょぼい……。

他のユーザーさんみたいに上手に書きたいです。

きっかけと結果

この世界に魔法の存在が確認されて、すでに100年以上が過ぎた。

きっかけは、世界各国で起こった現象からだ。ある日、世界中に黒いオーロラが同じタイミングで発生した。その漆黒にも勝る色は太陽や月の明かりを遮り、この青い惑星を闇に変えた。人々は「世界の終焉だ！」と叫んだ。まあ気持ちは分かる。しかし、オーロラは数分後には消滅し、世界は元の色彩を取り戻す。この事実は数時間で世界に伝わり、学者や宗教などの様々な人が自論を唱えていた。今考えると少し滑稽だ。

数日後、今度は原因不明の発熱が世界中に広がった。政府は黒いオーロラと発熱は関連性があるとして調査を始めるが、手がかりの尻尾も掴めない。とりあえず、患者を隔離する方法しか思いつかなかったようだ。感染する病気の可能性もあったからだろう。だが、その努力は実ることはなく、世界の9割の人が発熱の症状を訴えた。交通や生活ライン、流通などが停止し、このままでは大規模な死者が出る可能性が浮上する。

さらに数日経ったある日、意外な展開となった。今まで発熱で寝込んでいた者が、一気に回復に向かったのだ。不思議な能力に目覚めて……。

ある者は指先から火を出し、ある者は何も無い空間から水を作り出した。個人差はあるが、発熱した者は何らかの能力に目覚めていたのだ。本人たち曰く、「何となく出来る気がした」と言う。魔法の始まりだ。世界中の人々がタネも仕掛けない超常現象を起こして

いたので、魔法の存在は爆発的に世間に広まる。しかし、新しい技術は悪用されるのが世の常。

魔法が認識されて数週間後、世界は戦火に包まれていた。魔法を軍事に取り込んだ国々が他国に侵略を開始。第3次世界大戦が勃発したのだ。各国も急いで魔法中心の部隊を構成、迎撃をするための態勢を整えた。

戦争と同時に、様々な国が魔法の研究を行う。いくら便利な力と言っても、その存在は不安定なものだ。原理は？発生条件は？

研究の過程で解明されたのは以下の通り。

- 1．魔法を使える者と使えない者がおり、発熱がきっかけで魔法が使えるようになるらしい。
- 2．魔法を使える者には魔力が宿り、魔力を媒体として魔法を使える。この魔力の容量には個人差がある。原則的に、魔力を多く消費すると魔法の威力は比例することが確認された。
- 3．魔力の最大容量は訓練しても増加することはない。が、減少することもない。
- 4．ファンタジーに良くある詠唱はない。しかし、魔法はイメージによって攻撃力、構成スピードが上がるので、各自イメージしやすい詠唱で魔法を使うことが望ましい。

など、大まかに言ってこんな具合だろう。早い話が才能によって大きく左右されると言うことだ。

20年続いた大戦は、アメリカを中心とした国連軍が勝利を収める。

日本国は国連軍に所属しており、最前線で活躍したのを評価された。その活躍を支えたのが十二家だ。日本国はその後の国際社会で有利な地位を築く。

「学校？」

長い黒髪を首の後ろで纏めた少女が、疑問符を浮かべながら振り向いた。

少女は左目に髪と同じ色の眼帯を付けており、右目の瞳も漆黒と言って良いほど染まっている。顔のパーツがバランスよく配置されており、美少女と言っても過言ではない。しかし、凛と上がった目尻が目付きを悪くしており、170センチの身長も相成って少し威圧感を感じる。一言で表すと「クールな美少女」だ。

その少女の視線の先には、木で作られた椅子に座っている絶世の美女がいた。

オッドアイの瞳が少女をじっと見つめる。プラチナブロンドの髪が窓から入ってきた朝日を反射し、まるで美女の周りを天使が踊っているようだ。色気がある顔の造詣は同性でも見とれてしまい、グラマーな体格は男達の視線を釘付けにするだろう。

黒沼格。

数年前の冬。死にかけた少女を拾い、以後ずっと面倒を見てきた女性だ。

格はそのふっくらと唇を妖艶に動かす。

「ああ。ちなみに、もう手続きはしておいてある」

女性に耐性のない男性ならば、その艶やかな声だけで腰が砕けてしまうだろう。ただし、口調は女性らしいとは言えないが。

「また事後報告……」

「そう言うな。私の性格は知っているだろう？」

げんなりとする少女　　黒沼奏を見て、格はくつくつと妖しく笑った。

「……うん」

ため息混じりに頷いた奏は、テーブルの上に出上がった料理を乗せていく。

「おお、今日の朝食はスクランブルエッグか。グッジョブだ！！さすが私の“娘”だな」

「“母さん”が生活力ゼロの性格破綻者だからね」

「くっ、言うようになったなあ」

「母さんの娘ですから」

取り留めのない話をしながら、奏は格の向かい側の椅子に座る。

「拾ったときは従順で可愛かったのにな」

「はいはい。さっ、食べるよ」

中々ひどい扱い方だったが、格はそれをなんとも思っていないのか、二人で「いただきますー」と言いつて箸を手を取った。

「で、話の続き何だけど」

「ん？………ごくん。ああ、学校の件か。ちゃんと理由はある」

白ご飯を口に含んでいた格は、たっぷりと時間をかけて飲み込む。

「聞いて驚け！貴様の入学する学校は、何と世界最高峰の教師、生徒、設備がある“皇総合魔法学園”だ」

「……………は？」

ニタリと笑う母とは対照的に、娘はスクランブルエッグを食べようと口を開けた状態で固まった。

きつかけと結果（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！
もう感動しました。

感想・誤字などの指摘をお待ちしています。

母と娘（前書き）

三日連続更新です。

がんばった！

母と娘

「ちよっ、ちよっと待って！」

私は思わず立ち上がった。母さんは未だにドヤ顔で、未だにニヤニヤ笑っている。

……ちよっと殴りたい。

「す、皇総合魔法学園って、あの超エリート学園でしょ！私が入れるわけないじゃない。しかも理由をまだ言っていない！！！」

皇総合魔法学園。

日本のある離島に作られた、魔法使い育成を目的とした学園だ。島の半分は学園の敷地で、小学校、中学校、高等学校、大学、寮、研究施設などが建てられている。島の残りの敷地は、シヨツピングモールなどの娯楽施設が立ち並び、学生たちや観光客で賑わっているらしい。

学園には優秀な教師が揃っており、全て学長がスカウトしてきたという噂がある。教師陣は十二家出身の者や元魔法部隊に所属していた軍人、魔法研究施設に勤務していた科学者など様々な職種、人が勤めている。生徒の方は、かなり難しい試験を合格した者だけで、20人に1人程度しか受からない超のつくエリートだ。その合格率で運営が上手く行くのか？と疑問が出るが、毎年世界中から受験生が来るので問題はないだろう。

基本的には魔法を中心とした学園なのだが、普通の授業や部活も

やっております、特に運動部が盛んだった。学校行事なども豊富で、それ目当ての観光客も少なくない。

それでも、魔法使いの中でも超エリートが行く学園なのだ。私も初級魔法なら使えるようになったが、入学するには明らかに無謀だった。

「理由なら2つある。まず1つ目、これは依頼だ」

先程の不敵な笑いを消し、母さんは急に真剣な表情で話し始めた。仕事をしている時の顔だ。

そんな母さんの態度に私は落ち着きを取り戻し、再び椅子に腰掛ける。

「仕事なの？」

「ああ。最近、十二家の勢力図が変わりそうだな。十二家の連中は他の家を没落させようと必死だ。内輪で争って何とも滑稽だが、そうするとハイエナ共が群がってくるだろう？無能な奴らが虎視眈々と、十二家に入ろうと狙っているわけだ。そこで貴様には学園に入ってもらい、十二家連中の馬鹿息子と馬鹿娘を狙うハイエナ共から護衛してもらおう」

母さんは淡々と説明すると、何も無い空間からクリアファイルを取り出して私の目の前に置いた。私はパラリとファイルを開き、さっと目を通す。……って

「あの……護衛対象は何人でしょうか？」

「何で敬語なんだ。護衛対象は十二家出身の奴らで、学園に所属している奴ら全員だ。30人ほどだったか？」

はあ！？

「いやいや無理！ぜつつつたいに無理！！いくらなんでも多すぎるって！そんなに体が別れるか！某忍者漫画みたいに影分身使えってか！それに教師も混じってんじゃん！大人だったら自分の身は自分で守りんしゃい！！」

「H A H A H A、キャラが崩壊してるぞ。ボブは相変わらず面白い反応をしてくれるな」

「笑うな！って言うかボブって誰！？」

中学校の英語の教科書に出てくる外国人か！

とりあえず、深呼吸深呼吸。

す〜は〜、す〜は〜……。

「ひっひっふう〜、ひっひっふう〜」

「はいそこ茶化さない」

「ちっ、もう冷静になったか」

つまらなそうな顔になった母さんは、パクリと白ご飯を口に含む。

「もぐもぐ……ごくんっ。護衛対象の詳細はそれに書いてあるから、

ああ、こんな時に素直に感謝出来ない心が憎らしい。

本当は、感謝だけでは足りないほどに救われているのに。

3日後。

「そろそろ時間だな」

母さんがポツリと言った。

空港内では多くの人が行き交い、様々な声が混じって鼓膜に不快感を与えてくる。

私はキャリアバックを手に持ち、プラスチックの椅子から立ち上がった。

「そうだね。もう行かないと」

今でも母さんの元を離れるのは少し寂しい。でも、これは母さんがくれたチャンスだ。私は任務をこなしつつ、学園生活を出来るだけ楽しむことに決めた。

「あんまり、しつこいのは私のキャラじゃないな。ここで見送るところでしょう」

隣に座っていた母さんも立ち上がり、私の体を少し強く抱きしめる。

「えっ？ちよ」

思わず顔が赤くなるのが分かった。こんなことは姫島家の頃も、黒沼として生きてきた今までも経験がなかったからだ。

「しっかりとやってこい」

耳元で、いつもの凜とした声で、それでも温かくなる声質でそう言ってくれた。

私も母さんの背中に腕を回し、きゅっと抱きしめる。

「うん。行ってきます」

周りの人にかなり注目されていたけど、心が温かくなったのでよしよしよじ。

母と娘（後書き）

感想・誤字などの指摘を待っています。

親バカと感謝　く黒沼格く（前書き）

今回は格さん視点で書いてみました。

親バカと感謝 ～黒沼格～

side 黒沼格

少しずつ遠ざかっていく飛行機を、私は管制塔の屋根の上で煙草を吸いながら眺めていた。吐いた白い煙が頼りなく中を舞い、蒼空と徐々に同化していく。

「やはり、少しは寂しいものだな」

私は思わず呟いた。

振り返ってみると、この8年間は今までの人生の中で楽しかった。一日一日が昨日とは違う面白みがあり、幸福感や充実感に包まれている。

まさか、ただの気まぐれで拾ったガキが、こんなにも心の中で大きくなるとは思っていなかった。

「まったく、私も親バカになったもんだ。あいつが1人で生活するのに、こんなに不安になるとは」

くっくくく、と私は声を出して笑う。少し、声が震えていたかもしれない。それほど心配と言っことだろう。

と、後方に気配を感じた。

「こんなところにいましたか。探しましたよ」

「“レム”か……」

私の数少ない理解者であり、仕事仲間でもある。奏のことでも色々世話になった。振り向いてないので顔は分からないが、レムは微笑んでいるだろう。

「貴女のそんな顔を見る日が来るだなんて、お互い長生きしてみるものですね」

「ほつとけ」

私の照れ隠しが伝わったのか、レムはクスリと笑う。

「素直じゃありませんね、相変わらず。それに……本当はついて行きたかったんでしょ？」

いつものように、こちらの思考を見透かすような言葉を投げかけてくる。私は自嘲気味に口を歪ませた。

「まあ、な。でも、私がいたらアイツは気を使うだろうし、一度ぐらいは母親らしくしてみたいんだ。この仕事が終わったら、アイツはまた裏社会に身を投じることになるからな。あと、アイツはそこらにいる奴らより優秀だ。きっと誰にも好かれる」

「……本当に親バカですね」

「ああ。今更だろ？」

「そうですね。奏ちゃんが依頼に失敗して傷だらけで帰ってきたとき、貴女はすぐ様に仕返しに行きました」

レムは少し呆れが混じった声色でそう言った。そんな態度に少しムツとする。

「自分の娘”が可愛くない奴などいない」

「本気でまるくなりましたね。奏ちゃんに、今の貴女を見せてやりたいですよ」

レムはため息を吐きながら、何かごそごそとやっている。そして、私の目の前に一通の封筒が浮いてきた。

「奏ちゃんから預かったものです」

奏が？

少しの動揺が胸をかすめるが、それを押し殺して封筒を手取る。

中には、札束と手紙が入っていた。

「これは……」

まず、札束を手取る。間違いない。8年前、奏が家から追い出された時に持っていたものだ。ちよつと懐かしくて頬が緩んでしまう。次に手紙を手に取り、娘からの文章をゆつくりと読む

『母さんへ』

急に驚いたかな？直接渡すのはちょっと恥ずかしいから、レムさんに頼んだの。

正直にお礼出来なくてごめんね。学園にいけると聞いた時、本当に嬉しかったよ。ありがとうね。

ありがとうの言葉だけじゃ感謝の気持ちは足りないけど、依頼を達成して帰ってきたらもっと伝えるから。覚悟しといて。

一緒に入れたお金は、母さんが持つてて。勝手に使ったらダメだからね。私と母さんの出会った日の思い出の品なんだから。

じゃあ、心配は必要ないとは思うけど、体に気をつけてね。

追記：母さんとは血は繋がっていないけど、私にとっては本当の母さんだよ

あなたの娘より』

「親子揃って素直じゃないんですね」

私の涙を見たレムが、柔らかい声で言った。

私の娘を乗せた飛行機は、エンジン音すら聞こえなくなっていた。

親バカと感謝　〜黒沼格〜（後書き）

あれえ？こんなに良い人にするつもりなかったのに……。

感想・誤字の指摘など待っています。

こんな拙い文章を見てくださってありがとうございます。

学園と門（前書き）

最近、寒くなりました。

さむっ！

というわけで5話目です。

学園と門

「……でっか」

8時間ほど空の旅を満喫した私は、太陽が垂直になる直前に皇総合魔法学園の正門前にいた。

鉄の門の横幅は大型トラックが2台並んでも余裕がありそうで、高さは私の10人分ぐらいあるだろうか。敷地の境界線を表している煉瓦の壁は、門よりも高く、左右に広がっている。監視カメラが所々に設置しており、門番が門の向こうでこちらに睨みを利かせていた。

「それに魔法障壁と赤外線、対空用の魔法まで空に展開しているなんて……ずいぶんと厳重な警備ね」

私でも感知出来るほどの魔法だ。相当な魔力を込めているのだろう。赤外線や監視カメラは匠に隠してあるが、これは経験の上で気づいた。

ぼーっと突っ立っていても仕方がないので、とりあえず門番に話しかけようと思う。

第一村人発見!とな。

「あの」

ガコンと鈍い音を立てて、重厚そうな門が左右にゆっくりと開いていく。

ええ、私話しかける直前だったんですけど。この二、三営業スマイル全開の顔はどうすれば？

ぎぎぎつと軋むような動きで顔を無表情に戻す。

「……」

さて、これは歓迎されている証拠なのだろうか？門番は相変わらずこちらを睨んで、今にも魔法を放つてきそつだ。

怖いので、ちょっと様子を見ることにした。

5分経過。

状況に変化なし。

10分経過。

門は開いたまま。門番は睨んだまま。私は立ったまま。

15分経過。

門は開いたまま。門番は以下略。

20分経過。

門は以下同文。

25分

「って、待ってられるかー！ーい！ー！」

春の陽気に当てられるのも気持ちいいが、すでに太陽は頭の上に到達していて少し暑い。

この状況に耐え切れなくなった私は、風を切るように走って門を潜った。若干門番にひやひやしたが、門番は変わらない眼光で見守っていてくれる。

えっ？あの目つきがデフォルメなの？

門を通過し、桜の並木道を通り過ぎた私は、綺麗に清掃された石畳の上を歩いていった。どうやら、この石畳は学園のど真ん中を走っているらしい。右には小学校区画、左には中学校区画が広がっており、子供たちの喧騒がすごい。あと、魔法の起動音と破裂音がドツコンドツコン聞こえてきた。さすが魔法学園。喧嘩も想像を絶する。学園の区画の間は、障壁で区切られており、決められたところからしか出入りが出来なくなっていた。

「本当にすごい設備。私の護衛は必要なのかな」

正直に言って、この学園の守りを崩すには軍隊が必要だ。それでも、何日かは籠城できるだろう。内部も何かあったら警報が鳴るようになっているし、警備員が一定間隔で巡回している。だが。

「逆にきな臭い」

まるで、ここには大切な何かを隠しているかのような念の入れ方だ。それとも、ただ単に生徒を心配しているだけか。

「っと、そんなことはどうでもいいか。仕事に集中集中」

仕事に害がなかったら、それでいいかな。あまり首を突っ込まな

いほづが良いかも。

それからしばらく歩いてみると、ようやく高校区画が見えてきた。その向かい側に建っているのが大学区画だろう。

「……広すぎ」

昔、母さんから貰った腕時計を見ると、門を抜けて20分は経っていた。

少しだるくなった両足を動かし、高校の正門に近づく。20分前に見た門と同じように、ある程度距離が縮まったところで開いた。

「私は学習する」

鼻でフンツと笑い、高校区画に足を片方入れた。

「止まってください!!」

あれー？

皇総合魔法学園の中学校、高校、大学には風紀委員会が存在している。その名の通り、生徒の風紀を守っているわけだ。ただ、魔法中心の学園なので魔法によるトラブルが多い。そこで風紀委員会の生徒は、この学園の中でも優秀な者が所属している。

基本活動は区画間の生徒監視、校内パトロールなど面倒なものばかりだ。

当初は各区画で独自に活動していたが、学校行事などで連携ミスが目立ち、その対処法として委員会は一本化された。この連携ミスはほとんどの委員会であったので、今では一本化されたものが多い。

「……ふう」

少女は肺の中の空気を換えるように、軽く息を吐いた。

高校の正門にすぐ横にある詰所に少女は座っており、気の抜けた様子で門を見つめている。腕に巻かれた腕章は、風紀委員の“風”が装飾されていた。微かに春の風が少女の茶髪を撫で、徐々に眠気を誘ってくる。

「だれもない……」

少女は風紀委員の仕事でも一番暇な仕事、区画間の生徒監視をやっていた。

通常、別の区画に行くためには、許可書を各区画の事務室から貰わなければならない。それを詰所にいる風紀委員に渡すことで、移

動の許可を得ることが出来る。門は自動ドアと似て勝手に開くのだが、風紀委員が詰所で見ているので違反をする生徒は少ない。ようは、とても楽な仕事なのだ。

少女は春特有の暖かい気温に、こくりこくりと船を漕ぎだした。

ピーーーーーーーーーーーー。

もう夢の旅に飛び立とうとしていた時、違反者が出た合図である電子音が詰め所に鳴る。

「っー！」

一瞬で目を覚ました少女は、壁にかけたあつたロッドを手につかんだ。

「“フェン”」

少女が短く詠唱すると魔法陣が空中に浮かび、次の瞬間には正門に移動していた。彼女の目の前には黒髪の少女が校内に入ろうとしており、学園指定の制服を着てないのを見た茶髪の少女は、不審者と判断しロッドを突きつける。

「止まってください！ー！」

学園と門（後書き）

やっと学園のキャラクターを出せました。

バトル描写とかやりたいです。へたですけど……。

こんな駄文を見てくださってありがとうございます。

感想・誤字などの指摘を待っています。

高校区間と武器（前書き）

最近、私生活が忙しくなってきました。
更新スピードは落ちるかもしれませんが。

就職活動やらテストや卒業研究やら、殺す気か！

高校区間と武器

「す、すみませんすみません！」

「あゝ……大丈夫だから。あんまり気にしないで」

茶髪の女の子が、私に向かって一生懸命に腰を折って謝っていた。ふんわりとした長髪が、風と踊るように揺れる。

高校区画に入った途端に、私は目の前の少女に連行された。連行場所は正門のすぐ近くで、さながら詰所と言った所だろう。教師に連絡しようとする少女を必至で止め、30分ぐらい説得した。新品の学生証を見せ、先ほど納得してもらったばかりだ。

頭を下げる彼女があまりにも不憫で、私は気にしていないアピールでヒラヒラと手を振る。そんな態度に女の子は、ほっと安堵した表情をした。

かわいいなあゝ。

女の私でもそう思う可憐さだ。肌にはシミ一つなく、まるで陶器のように透明感がある。眼はクリンと大きく、少し小柄な体型に良く似合ってた。まあ、間違いなく純粋な日本人ではないだろう。瞳が少しグレーがかってるし。

私は荷物を手に取った。

「じゃあ、私はそろそろ行くから」

「あつ、待つてください!」

えっ、まだ何か?

女の子は申し訳なさそうに、上目使いにこちらを見つめてきた。これで落ちない男はいない。たぶん。

「あ、あの……案内させてくれませんか?色々迷惑をかけてしまつたし、そろそろ交代の時間ですので」

ラッキー。

やはり、これからの護衛任務をするとなれば、学園の地形を細かく頭に入れておく必要がある。後で本格的に回るが、今から軽く調査するのもあるくないだろう。それに、向こうから言ってくるとは都合が良い。

「うん、願ってもないことだよ。お願いね」

私がそう言うと、女の子はぱあっと顔を明るくして「ありがとうございます!」とお礼を言ってきた。お礼を言うのはこちら何だけぞ。

しばらくしてきた別の風紀委員の子に後を任せ、私と女の子は連れ立って歩き出す。

「まず、荷物を置きたいですよ。寮の方へ案内します」

ニコリと笑う少女は、きつと男子たちにモテモテだろう。少女が先に歩き、その少し後ろを私が付いていく。

月上 つきかみ
緋乃夜 ひのよ

私はこの少女の名前を知っていた。別に月上が名乗ったわけではない。月上という苗字は十二家に所属している家の名前であり、私の護衛対象の一人だ。日本人とドイツ人のハーフらしい。

利用したみたいで少し心苦しいが、これも仕事だ。汚い方法はやりなれている。

それでも、呼吸が苦しくなるような感覚は慣れない。

「……疲れた」

私は月上の案内を終えて、寮の部屋にいた。

えっ、展開が早いつて？ちっちゃいことは気にするな。それワカ……これ以上は駄目かな。

ちなみに、大まかな施設の場所はこんな感じ

右 グランド、体育館、室内プール、模擬・魔法練習場、など体を動かす施設。

中央の下

男子寮。

中央の真ん中

H型の校舎

中央の上

女子寮。

左

文化部の部室棟、闘技場。

と、こんな感じだ。

闘技場なんて何に使う気なんだろう。

ベットにすくとんと座り、眼下にある複数の段ボールと刀に視線を向ける。

私の寮の部屋はこの318号室だ。ベットやタンス、冷蔵庫、机とそれに付属する椅子は標準で置いてある。簡易キッチン、シャワーやトイレもあり、シャワーとトイレは別。一部屋しかないが、こちらのマンションよりも絶対広い。しかも一人部屋。なんて贅沢。

今日は一日中歩きつ放しだったので疲労は溜まっているが、明日からの活動のため荷物を整理しよう。

ほとんどの荷物は宅配便で送ったので、手持ちはキャリーバック一つでだったが、こうみると案外多い。

黒い鞘に収めている刀を手に取り、少し魔力を込めてみる。すると、刀はみるみる変形を始め、黒い十字架のネックレスに姿を変えた。この刀には格の魔力が定着されていて、私の魔力だけを感じし形を変えるようになっていた。普通、魔法を自分とは違う物体に

定着させるのは、数人がかりの高ランク魔法使いで行う。

ネックレスを首にかけ、次に一番小さい段ボールを引き寄せる。段ボールは見た目と反してずっしりと重い。段ボールより一回り小さい金属のケースが入っており、その鍵穴にネックレスの十字架を差し込んだ。カキンと乾いた音が鳴った。次はケースを開けると、そこには分解された鉄のパーツがある。パーツを手に取り、いつもと同じように組み立てていく。

20秒ほどで組み立てたものは“デザートイーグル”だ。自動拳銃の中ではかなりの重量級に入るが、その威力は世界成功。反動はかなりのものだが、これは日頃の訓練と慣れで克服した。

別の段ボールからホルスターを取り出し、デザートイーグルをそれに納めて直に胴体に巻きつけた。

「よっ、と」

革のひんやりとした冷たさが、少し気持ちいい。

窓から外を見ると、空はすでに赤く染まっていた。学園の調査はまだ明日にしよう。こんなに警備が厳しかったら相手も簡単には手は出せないし、何より疲れた体での仕事は危険だ。

私はふかふかのベットに潜り込み、その意識はすぐに闇の向こうに消えていった。

高校区間と武器（後書き）

感想・誤字の指摘など待っています。

銃と刀って男のロマンですよね。

奇襲と校長（前書き）

久しぶりの更新です。

奇襲と校長

次の日、私は『校長室』というプレートが嵌めてあるドアの前にいた。

理由は至って単純。母さんと高校区画の校長が昔からの友人で、私がこの学園に編入出来たのも校長が手続きしてくれたらしい。

ぶつちやけ職権乱用。

この事実を知っているのは私と母さん、高校区画の校長と副校長らしい。学園トップの学長や理事長には秘密とのことだ。大丈夫かな？

『まあ、危険を冒して協力してくれているのだから、挨拶ぐらいはしておけ』と母さんが言っていたので、昨日の内にアポを取って来たわけだ。

「ふう」と軽く息を吐き、ノックを二回する。すかさず「どうぞ」と聞こえてきたので、音もなくドアを開けて中に入った。

「失礼しま

」

微弱な魔力を感じた。

とつさに横に跳ぶと、先程までいた場所が蒼い炎に包まれている。

服の中に手を入れて拳銃を取り出し、その場にいるもう一人に向けて発砲した。

パシユ。

デザートイーグルにしてはかなり小さな発砲音だろう。それもそのはずで、この拳銃は私が試行錯誤して改造した特別製だ。サイレンサー並の発砲音と、さらに速度を増した弾速。さらに母さんが改良した弾や、魔法関連のものが込めてある。

相手は私の急な発砲に驚いたのか、少し慌てた様子でその弾丸を火球で弾き落とした。しかし、遅い。

相手が火球を放った時、私はすでにそいつの懐にいた。腕をがっしりと？み、体を反転して相手を背中に乗せる。

「はっ！」

いわゆる一本背負いだ。気合いの声を出して、思いつきり相手を絨毯の上に叩きつける。

「むっ！？」

絨毯と言っても少しは痛いのか、相手は僅かに顔を顰めた。

私はネックレスに手を添える。

「汝、我との契約を果たせ」

詠唱というより発動キーの言葉を紡ぐ。ネックレスが形を変え、昨日とは逆に黒い刀になった。そしてそのまま、切っ先を相手の喉に突き付ける。

「いくら校長と言っても、生徒相手に奇襲は駄目でしょう」

私がそう言うと、相手

校長は苦笑をした。

「ごめんなさいね。でも、貴方は書類上っただけでしょう?」

校長はその綺麗な顔を私に近づけると、悪戯が成功した子供のよ
うに笑う。今確信した。この人はそうとう厄介な人だ。カモセーブ
していたし、頭もかなり切れるだろう。

拳銃をホルスターにしまって刀をネックレスに戻した私は、校長
に向けて手を向ける。“彼女”は私の差し出した手を握り、立ち上
がって校長の椅子にドカツと勢い良く座った。

「では、改めて自己紹介しましょう。私は紅色へにいろホタル。皇総合魔法
学園の高校区画の校長をしているわ。よろしく」

「黒沼奏です。今回は学校の手続きなど、ありがとうございます」

「いいのよ。こっちだってそれなりの対価は貰っているから」

校長はそう言うと、くつくつと笑う。その様子が少し母さんに似
ていた。

「それにしても、うん。奏ちゃんは合格ね」

「合格?」

「そう。あっ、座っていいよ」

校長は純白のソファと指さしたので、ありがたく座らせてもらう。何これ、めちゃくちゃ気持ちいい。

「一応学園側を騙しているんだから、護衛につく人は出来るだけ優秀な人間が良いじゃない？でも、格からの連絡は『魔法を使えない人間』って言うから、もう不安になっちゃったの。それで奇襲をかけて試したのよ」

試したって……

「最初の炎は規模は小さいですが、かなり高度な魔法ですよ。もし、私が避けきれなかったらどうしたんですか？」

火のイメージは一般的には赤い火だろう。だが、赤い火は酸素を有効活用出来ていない。そのせいで一酸化炭素などの有害物質が出来るが、蒼い火は酸素供給量が十分で、効率良く燃えている証拠だ。なので赤よりも蒼の方が高温。魔法で蒼い火を発生させるのは、S級の高度なランクに分類される。

私があ魔法を回避できなかつたら、絶命していただろう。

「どうしたと思う？」

校長は微笑んで、可愛らしく頭を傾げた。炎と同じ、蒼いショートカットの髪がふわりと動く。

「……」

やはり、この人はやばい。冷静な人柄に見えるが、その中身はな

にもかもを燃やす炎だ。おそらく、自分に害をもたらす人間がいたら、彼女は容赦なく殺してしまうはずだ。

私はニコリと営業スマイルをして、校長の静かな重圧を無視する。

「さあ？わかりませんね」

その答えに校長は重圧を消し、嬉しそうに表情を崩した。

「やっぱり格が自慢する娘ね。実力も判断能力も申し分ないし、あの格が丸くなるほどだから性格もいいでしょ」

校長はデスクの引き出しから、一枚の紙を取り出した。

「黒沼奏さん。貴方を正式に編入することを許可します」

デスクの上にあつた判子を手に取り、朱肉をつけて紙に押し付けた。

「魔法の素質がほとんどないからFクラスになるけど、これは仕方のないことだから諦めてね。制服とか教科書は寮の部屋に送っておくから。始業式は4月8日だから忘れないで」

ついさっきまでの威圧感はなく、テキパキと伝えてくる姿は『出来る女』と言ったようで少し格好いい。

「とまあこんな所かな？何か困ったことがあつたら言つてね。何だか、貴方のこと気に入っちゃった。あと校長先生とか呼ばないで、名前で呼んでね」

「は、はい。分かりました」

こちらを見つめてくる校長、じゃなくて紅色さんに肉食動物を連想した私は、そうそうに校長室を出ることを決める。

「では、これで。色々ありがとうございます」

急いで立ち上がった私は、早足でドアまで進む。

「あ、そうそう。言い忘れていたけど、私は“男”よ」

.....。

「.....えっ」

奇襲と校長（後書き）

自分の小説を読み返していたら、結構書き忘れがありました。お恥ずかしい。

感想・誤字の指摘など待っています。

お気に入り登録が二桁になりました！減らさないように頑張ります。

友達と奇異の目（前書き）

展開遅いですかね？

友達と奇異の目

そんなこんなで4月8日。始業式の日だ。

いつも通りに6時30分に目を覚ました私は顔を洗い、ビニールに包まれた新品の制服を取り出す。制服は男女共にブレザーで、黒を基調としている。赤いラインが襟などに走っていた。

「っと」

ネクタイをキュツと締め、洗面所の鏡で形を確認する。バッチリ決まっていた。

椅子にかけている眼帯を取り、するすると左目を隠す。次に後ろ髪をキツチリとゴムでまとめ、まだ形が崩れていない学生靴を引き寄せる。

準備完了だ。

時計を見ると、まだ15分しか経っていない。でも、計画通りだ。

玄関の方へ歩いて行くと、コンコンと軽いノックがされた。

「黒沼さん？」

「は〜い。ちょっと待ってね」

ドアの向こう側にいる少女にそう言つと、昨日きたばかりの学生靴を私は履いた。中々履き辛い。

「行ってきます」

誰もいないから、ぼそりと小さく呟く。

ドアをドーンと開けると、そこには月上が太陽の光に反射しながら立っていた。……天使かっ！

私の姿を確認した月上は、ふんわりと微笑んだ。

「おはようございます、黒沼さん。今日も時間ぴったりですね」

「おはよう。じゃあ、行こうか」

私たちは並んで廊下を歩き出す。

私が月上に不審者扱いされてから、ずいぶんと仲良くなった。と言つのも、月上があれから毎日私に会いに来てくれたからだ。それは謝罪からか、それとも転入生のことを心配してくれているのか。どちらにせよ嬉しいものだ。他人から会いに来てくれるなんて、人生でも数回しかない。ちなみに、母さんは別だ。

「すみません。私の時間に合わせてもらって」

月上が申し訳なさそうに私を見た。まるで、飼い主に怒られるような犬だ。

思わず苦笑した私は、気がつくとな上の頭をポンポンと軽く叩いていた。

「別にいいの。私だって早く行かないといけないし、それに月上以外に友達がいらないからね。友達と一緒にいたいのは普通でしょ？」

少し照れくさかった私は視線をそらしたが、視界の端では月上が満面の笑みになったのを確認出来た。

「ありがとうございます」

「んっ」

短く頷いて、月上の頭に乗せていた手を下ろした。

階段をトントントンとリズム良く降り、食堂に入る。まだ時間が早いためか、座っている生徒は少ない。しかし、その誰もが私たちいや私の方に意識を向けていた。敵意は一つも感じられないが、良い気分はしない。

きゅっ。

そんな私の心情を察したのか、月上は私の手を引くとさっさと食券販売機に進む。

「どれが良いですか？」

「えっ、じゃあAランチで」

「わかりました」

私がお金を渡すと慣れた様子で購入ボタンを押し、出てきた二人分の食券を持ってカウンターに移動する。食券とランチを交換して、

近くにあった空いている席に私たちは座った。

「あまり気を悪くしないでくださいね。みなさん転校生が珍しいだけですから」

目の前に座った月上が、困ったように微笑みながらフォローをする。

確かに、この学園に転校生は珍しい。ただでさえ難関の試験を合格して入学しているのだ。編入試験はその数段は上の試験で、合格した者はかなり優秀でないといけない。それに、それほど優秀なら普通の試験を受験した方が、合格する確率は上がる。よって編入をする利益はあまりなく、転校生はよっぽどの理由がない限りいない。

「気にしていないよ。分かったことだし」

私は何でもないように言うと、ランチについていたコーンスープを一口飲んだ。

「えっ、黒沼さんFクラスなんですか!？」

朝食を取った私たちは、高校区画の正面玄関の前にいた。そこにはすでにクラス編成が張り出されており、生徒の一人一人が様々な反応をしている。

と言うか。

「月上つてAクラスだったんだね……わっ、しかもSクラスにも入ってる。って同じ2年生だ。敬語使っているから年下と思ってたよ」

風紀委員ってことでそうとうな実力者だとは分かっていたが、まさかSクラスにも入っているなんて。

皇総合魔法学園の高校区画では、A・B・C・D・E・Fまでのクラスがある。振り分ける基準は生徒の成績で、Aに近いほど優秀というわけだ。私が転入するFクラスは最下位。このクラスの他にもSクラスと言う特殊なクラスが存在して、成績上位の生徒や才能のある生徒がそこに所属している。と言っても特殊クラスなので、選択授業の時しか機能しないらしい。なのでSクラスに所属する生徒は、同時に別のクラスに所属していることになる。

私が感心したように月上に視線を移すと、彼女は驚愕した様子で固まっていた。

まあ、書類上では編入試験したことになってるから、それに合格していると言うことは成績が良いと思われるのだろう。現実には試験なんて受けてないし、魔法もほとんど使えないんだけど。

「月上？」

私が月上の目の前で手をひらひら振ると、彼女はハツと我に返る。

「風紀委員会いなくていいの？そのために早起きしたんでしょ」

「え、いや……でも」

「ほらほら時間ないよ。私も職員室行かないといけないから」

何か言いたげにしている彼女の背を押した。月上は渋々といった感じで、早足に歩いて行った。

月上の姿が見えなくなるまで見送った私は、朝の新鮮な空気を肺に取り込んだ。

「ん~~~~~~~~……っと。仕事の打ち合わせに向かいますか」

友達と奇異の目（後書き）

護衛対象30人ぐらい居るのにまだ一人。
おかしいですね。

たぶん次は月上視点ですかね。たぶんですけど……。

読んでくださってありがとうございます。
感想・誤字の指摘など待っています。

発見とFクラス（前書き）

最初にお詫びを。

すみません。前回の後書きに『月上視点』って書きましたが、無理でした（汗）。

一応書いたのですが、あまりにもひどかったためボツにしました。もう少しキャラを掘り下げてから掲載しようと思います。

本当にすみませんでした。

発見とFクラス

紅色さんと簡単な打ち合わせをした私は、職員室の中にいた。

職員室はかなりの大きさで、教室を4個ほど繋げた広さだ。少し視線を移せば、名立たる教師が視界に入る。あっ、あの人は護衛対象だ。

「黒沼？」

少し余所見をしていたのが悪かったのか、目の前にいる教師が怪訝そうに呼んでくる。私は仕方なく教師に目を向けた。

しおなが
塩長 護まもり。

それがこの教師の名前だ。十二家の一つ、塩長家の長男で、将来は家督を継ぐことを約束されている。まだ26歳と若く、その整った容貌もあって女子生徒には人気があるらしい。毎年、告白する者もいるとか。体は均等に筋肉が付いており、無駄な脂肪は排除されている。身長もすらりと高く、190センチ前後だろう。この人も護衛対象だ。

「何ですか？」

私はお馴染みの営業スマイルで首を傾げた。その堂々としている態度が良かったのか、塩長は苦笑いをしたが何も注意はしない。

「俺は塩長護。黒沼の担任だ。これからよろしくな」

「はい、よろしく願います」

「よし、じゃあ早めに教室に行くか。お前を紹介しないといけな
とな」

塩長は「ついて来てくれ」と言うと、職員室を後にする。私もそ
れに続く。

廊下はまだ生徒で溢れており、喧騒が鼓膜を激しく揺らす。その
中の女子生徒の何人かは、塩長のことを熱い目で見つめている。お
盛んなことだ。私の方にも視線は来ているが、月上も言っていた通
り物珍しいだけだろう。転校生で眼帯とくれば、嫌でも目立ってし
まう。とっ

(……ああ)

廊下の向こう、距離にして80メートルほどだろうか。人と人の
間から一瞬だけだったが、訓練されたこの瞳には確かに見えた。

腰まで伸ばした光沢のある黒髪を優雅に揺らし、威風堂々と胸を
張って歩いていた。男女問わずその姿を追い掛け、クールにきりっ
とした表情をぽっつと見ている者もいる。

(大きくなっ たな)

彼女は私の半身だったはずの存在。本来ならば、私も彼女ように
優秀になるように運命付けられた存在。

しかし、一方は人生の絶望を、失望を与えられ

一方は人生の希望を、有望を与えられた。

姫島 澪^{みお}

私と共に生まれ、双子の妹。二卵性双生児のため、顔はあんまり似ていない。正直に言って澪の方が断然綺麗だと思う。ずいぶんと雰囲気や容姿は変わっていたが、それでも一目見ただけで分かった。と言いか、彼女も護衛対象なので資料で見っていた。

「おゝい、早くしろ〜」

苦笑気味の声でしたのでその方向に首を回すと、塩長が階段の所で私を呼んでいた。

「黒沼奏です。よろしくお願いします」

この学園に来てすっかり言い慣れた『よろしくお願いします』を口に出し、軽く頭を下げる。パチパチとそこそこの拍手が鳴った。

「黒沼への質問は後にしてくれよ。今日は連絡事項がかなりあるんだからな。黒沼、あの空いている席に座ってくれ」

塩長がそう言って指し示した席は、一番窓側の列の一番後ろだった。私は「はい」と短く返事をして、机と机の間を移動する。その間も眼帯に生徒たちが注目しているのが確認できた。いい加減ため息をつきそうだったが、息を飲むことでそれを我慢する。

私が席に座ったことを確認した塩長は、プリントを配って今日の全体的な説明を始めた。すでに紅色さんから聞かされていた私にとって、とても退屈な時間だ。

外を見ようかと考えていた時に、唐突に肩をトントンと叩かれた。隣の席を確認すると、ワインレッドの髪をポニーテールにした少女が、勝気そうに口を歪ませながらこちらを見ていた。とてもスタイルがよく……って、この学園スタイル良い人多くない？胸とか、胸とか、胸とかっ……！！

「よっ、転校生。この学園には慣れたかい？」

ハスキーボイスの耳心地が良い声で、何の脈絡もなく質問してくる。

「まあまあ慣れたかな。少なくとも、自己紹介もなしに質問されるぐらいには」

少し皮肉気に言葉を返すと、少女はますます面白そうに表情を変えた。それと共に目をキラキラさせながら顔を近づけてくる。

「ははっ、それもそうだな。オレの名前は城道院じょうどういん 桜さくらだ。よろしくな」

桜……容姿と全然会ってない気がする。

「桜……容姿と全然会ってない気がする」

「ははっ！お前はつきり言うな」

「あっ」

しまった。つい考えを口に出してしまっていたようだ。

「気にするな。オレもそう思っているんだからな」

バツが悪そうにしていた私をフォローするように、城道院はからからと豪快に笑う。今、ホームルーム中なんですけど。何で誰も注意しないわけ？塩長ー？

ちなみに城道院も十二家の一角であり、十二家の中でも最大の発言権をもつ家だ。だから本当は城道院桜のことは知っていた。

なんで名門家がFクラスにいるのか疑問を持つ人もいるだろうが、そこはおいおい話していくとしよう。

「オレのことは桜と呼んでくれ。似合っていない名前だろうが、オレは何気に好きなんだ」

「んっ、わかった」

「よし！これからの学園生活は、オレが面倒見てやるからな！」

桜はクラス中に宣言するように声を張り上げると、私に向けて手を差し出してくる。思わず微笑んでしまった私は、その意図を理解し握手をした。

発見とFクラス（後書き）

今回は十二家のオンパレードでした。個人的には桜さんがお気に入りで。

感想・誤字の指摘など待っています。

今回も読んでくださって、ありがとうございます。

護衛任務と殺し（前書き）

今回はちょっとグロいかもしれません。

護衛任務と殺し

ぶわつと暖かな風が通り過ぎて行った。

僅かに咲いていた桜の花びらが、その風にさらわれていく。

屋上のフェンスに寄りかかっていた私は、体育館を見下ろしながらイヤホンを耳に付けた。ポケットに手を入れ、イヤホンと接続している機器を操作する。

ザツ、ザザツ

ノイズがイヤホンから出てくるが、構わず操作を続ける。

「 っとなりますので、新入生の皆さんは精進を怠らないよう……」

途端にノイズが止み、透き通った女性の声が聞こえてきた。微かに幼さが残っている声なので、在校生の祝辞か何かだろう。

皇総合魔法学園の入学式は始業式と同じ日にあり、午前は始業式、午後は入学式の日程になっている。少しハードなスケジュールかもしれないが、早く授業を行うためには仕方のないことだと紅色さんが言っていた。さすが世界一の学園。

本来ならば私も体育館にいななければならないのだが、護衛の仕事があるため、紅色さんが特別に欠席するのを許可してくれた。塩長には何と言ったのだろう？

体育館から視線を移し、此処から見える範囲を視界に入れる。

なぜ私が体育館ではなく屋上から護衛しているのかと言うと、一言で言えば体育館の中は安心だからだ。世界トップレベルの教師陣が10人以上はいるし、その中でも紅色さんは格が違う。何かしようとしている輩を見過ごすことはないだろう。なので、相手が狙ってくるとしたら外からしかない。体育館が危ない可能性も少ないがあつたので、一応小型マイクを五つほど仕掛けてある。ポケットの中にある機器は、その小型マイクが出している周波数に合わせて音を拾うことが出来るのだ。

(外から狙うとしたら超遠距離魔法か、私と同じ銃器ってところかな。体育館内部だと、ナイフか事故に見せかけたトラップぐらいしか方法はないはず)

右目を一箇所に留まらせず、すばやく全体を見渡す。

「ん？」

ある一角を見たとき違和感を感じた。

運動場の隅に植えてある大木の枝が、僅かにだが動いた気がしたのだ。ちなみに、屋上からその大木まで目測で300メートルはある。

「我、瞳は驚より遠く、永久に見渡す」

自分の中にある魔力を込め、私が使える数少ない魔法の一つを発動させる。身体能力向上系の魔法で、魔法使いならば誰もが小学生の授業で習うものだ。

視力を強化した私は、その大木をじっと見詰める。青い葉の間から、黒く鈍る銃身が見えた。

「こんな早くからターゲットを狙うなんて、仕事熱心だねー。まっ、私も人のこと言っちゃられないか」

一旦視力を元に戻し、さらに体を強化するために目を閉じる。

イメージするのは常に最強の自分って、某キャラクターも言ってたし。

「我、体は何より強く、何より早く、何より見える」

詠唱をすると、体に力が漲ってくるのが分かった。頭のスイッチを日常から非日常に切り替える。

瞼をゆっくり上げると、世界が全て変わったかのように感じた。

軽く体を動かして調子を見る。

「さてと。狩を始めるか」

きっと、その時の私の顔は、学園関係者には見せれないほど歪んでいたはずだ。

s i d e ? ? ?

その男は、幼少期から社会の闇に生きていた。

物心ついた頃には銃を持っていて、すでに何人も命を奪っていた。男は殺し屋集団に拾われた子供だったのだ。親は死んだのか、それとも捨てたのかは分からない。

10歳の頃には単独任務を任せられ、老若男女を多く殺してきた。15歳を過ぎた時には、100人以上の息を止めている。

男はそれでも、人を殺すことを悪いことだとは思っていなかった。誰も、それを教えてくれる人がいない。周りの仲間たちも同じ事をやっているのだから、仕方のないことだった。

死についても何とも思わない。それどころか、自分自身はいつ死んでも良いとすら思っている。なぜなら、自分の代わりなど組織の中では何人もいるからだ。生き続ける理由はない。ただ自分は与えられた仕事をこなすだけ。サラリーマンと一緒にいる。

男は枝の上につつ伏せに乗ると、狙撃銃をカチツと構える。一発装填型のポトルアクション式ライフルで、カチャッと弾を込めた。スコープを覗きこみながら、その倍率を変化させていく。

スコープから見たのは、姫島凌。

倍率がピッタリとあい、そのクールな顔が鮮明に映る。

両手でしっかりと銃を構え、それでも体をリラックスさせながら標準を合わせた。トリガーに指を持っていき、全神経を集中させる。

3。

息を吸い込み、それを肺で止めた。

2。

トリガーの指に力が入る。

「なにやってるの？」

つと、覗き込んでいたスコープが急に暗くなる。

「っ!?!」

慌てて顔を上げようとしたが、

シューン。

「があ!?!」

左腕の付け根に激痛が走った。

早急に銃を放棄し、相手の顔も確認しないまま枝から飛び降りる。その途中で左肩を見ると、肩から先は綺麗になくなって血を噴出していた。

芝生の上に着地すると、あらかじめ確保していた逃走経路に向かって走り出す。

「さすがプロだね。緊急事態が発生した途端、逃走を決断するのは良い判断してる」

その声はすぐ後ろからしたので、男は懐に入れておいたコンバットナイフを残っている右手で取り出した。そして、振り向き様にナイフを振り抜く。

「遅い」

「ぐあっ!!」

だが、今度は右手が体から飛びだった。

それでも男はまた走る。しかし、その両腕では体のバランスが取れず、グラウンドの中央に激しく点灯した。男の大量の血液が地面を濡らし、傷口に砂が付着する。

「はあはあはあ!!」

神経が狂いそうな激痛に、男は体を丸くさせた。

「何、もう終わり?」

冷たく、何の感情も籠っていない声帯の振動が、男の鼓膜を揺らした。男が必死に目玉を動かし、その方向を向く。

「その様子だと、魔法を使えないの？まったく、歯応えのない」

失望を滲ませた言葉を吐いたのは、デザートイーグルと黒い刀を両手に持ち、黒い右目を細めた奏だった。

男は奏の眼帯を視界に収めると、大きく目を見開く。体が勝手に震えだし、歯がガチガチと噛み合わなくなる。

「く、「黒い氷」」

「……へえ」

グキヤツ！！

その単語を奏が理解した瞬間、男の喉は彼女の踵に踏み潰された。

「！！！」

男が音もない悲鳴を上げる。対する奏は、静かな怒りを含ませた表情で男に顔を近づける。

「私、母さん以外にその名前で呼ばれるのは嫌いな」

奏はペロリと男の頬を舐めると、ニンマリと歪んだ笑みを浮かべた。

「だから、今からたっぷりと苦しめて殺してあげる」

護衛任務と殺し（後書き）

キーワードで主人公は弱いとありますが、あれは魔法使いに対してです!!

後付けじゃないですよ（汗）

ところで、やっと奏は本領発揮です！ヤンデレっばい……。

感想・誤字の指摘など待っています。

こんな未熟な文章を読んでくださって、本当にありがとうございました。ます。

傷とお粥（前書き）

今回はお話はあまり進みません。
しかも、久しぶりの更新です。
さらに少し短いです。

申し訳ありません（汗）

傷とお粥

「……しまった」

名前も知らない男の死体を処理した私は、熱いシャワーを頭から浴びながら頭を抱えていた。刀で切った時の返り血がお湯と共に体を滑り、無機質なタイルを赤く染める。

何で殺したんだろ。

その血を見ながら私は後悔していた。別に人殺しに罪悪感を感じている訳じゃない。男を殺したことで、情報が手に入らなかったのを後悔しているのだ。

魔法も十分に使えない私は、30人の護衛対象を同時に守らないといけない。それには情報が不可欠だ。相手が誰を狙い、誰を無視しているのか見極めないと、監視しなくていい対象まで監視してしまう。それでは労力の無駄になり、護衛が手薄になってしまう場合がある。複数人数でバラバラに狙われたら終わりだ。

それと懸念がある。

今日殺した男は魔法が使えなかった。と言うことは、あの男は魔法使いの家の出身である可能性は低い。おそらく、黒幕が解らないように外部の者に依頼したのだろう。尻尾をつかむのは困難になった。それに、今度は魔法が使える殺し屋がくるはずだ。

正直に言って、私は魔法使いに対しては一気に弱くなる。相性が悪いのどのではなく、この世界では魔法が絶対的に強いのだ。

月上がこう言うのは理由がある。

始業式と入学式に私が欠席していた建前は、体調不良だったからだ。きっと彼女はそれを誰かから聞いて、心配して見に来てくれたのだろう。純粹に嬉しい。

「うん、大丈夫。少し寝てたら治ったよ」

私が無意識にニツコリと笑ってしまつたと、月上は目に見えて安堵の表情に変えていく。

「良かった……これ、お粥作ったので食べてください」

「えっ、本当！？ありがとう!!」

私は月上が取り出した大きめのタツパを受け取る。

「では、私はこれで失礼します。今日はしっかりと寝てください。きっと慣れない環境で疲れたんですよ」

良い娘。

玄関先で別れた私は、さっそく部屋に戻つてタツパを開ける。閉じ込められていた湯気がムワツと上がった。お粥には溶き卵が入っていて、真中には梅干しが陣取っている。

スプーンをキッチンから持ってきて、さっそく一口食べてみた。

「……おいしいー!」

久しぶりに人に作ってもらった料理は、予想を遥かに上回っていた味だった。月上の実力もあるのだろうが、今日のこの料理は特別に美味しいと思う。

私も料理の腕には少し自信がある（母さんが家事全般出来ないため、必然と家のことは私がやっていた）。しかし、自分で作った料理というのは、自分で食べてもそれほど美味しいとは思えない。母さんが美味しいそうに食べるのは好きだけど。

やっぱり自分とは違う誰かが、私のために作ったくれた事に意味があると思うのだ。

お茶碗3杯分あったが、私はそれをペロリと食べきった。

傷とお粥（後書き）

よく小説などで傷を気にする女性はいますが、個人的には傷がある女性が好きですね。

ちよつと惹かれるものがあります。ああ、苦労してそれでも生きてきたんだな、と。

感想・誤字の指摘など待っています。

こんな稚拙な文を読んでくださり、ありがとうございます。

精霊魔法とその定義（前書き）

まったく話が進んでいません!!

すみません。

精霊魔法とその定義

翌日。学園では授業が始まる。

「魔法の中には精霊魔法というのがあります。これは中学生の時に習ったと思いますが、今日はそれをより深く勉強していきましょう」

少し白髪が混じってきた男性教師が、出席確認をすると授業を始めた。

ここで魔法の基本について補足しよう。

魔法は大別すると属性魔法、精霊魔法、強化魔法、弱化魔法がある。それぞれから派生したりして、結構複雑なのだが、今は精霊魔法について説明しようかな。

精霊魔法。

文字通り精霊を媒体にしての魔法だ。扱いは属性魔法や強化魔法と同じなのだが、その効果と威力が桁違いに上がる。基本的に属性魔法と精霊魔法が同等の攻撃をすると、精霊魔法が圧倒的に強いのだ。

もちろん欠点もある。

精霊と契約するので、精霊とのイメージの共有や信頼関係が必要となる。しかし、精霊は中々気難しい性格をしており、契約をしてくれるのも稀だ。しかも魔力も多く消費してしまうので、長期戦には不利になってしまう。こんなことは、とっくの昔に母さんから教

えてもらった。

「では、どんな精霊がいるのか、誰かに答えてもらいましょう」

教師のその言葉に、Fクラスの面々はさつと目を逸らした。さすがFクラス。

視線を逸らしていないのは、私と隣の桜、ボブカットの女の子と眼鏡をかけた男子だけだった。

「そうですね……黒沼さんに答えてもらいましょうか」

「はい」

ガタつと椅子を引き立ち上がる。

「主な精霊は、火の火蜥蜴^{サラマンダー}、水の乙女^{ウンディーネ}、風の妖精^{シルフ}、土の小人^{ノーム}がいます。サラマンダーは気性が激しく、契約するのは難しいとされています。ウンディーネの場合、男性に対しての契約は容易ですが、女性の場合は友情関係を結ばないと契約してくれません。シルフは対価を出さなければ契約してくれませんし、ノームは誠実さを見せなければ契約出来ません」

「はい、良くできました。さすがですね」

編入してきたから、このくらいは出来ると思っているのだろうか。教師は満足げに頷くと、私に席に着席するように促してきた。

「やっぱり編入試験を合格してきただけはあるね」「でも何でこのクラスにいるの?」「さあ?もしかしたら裏口入学かもしれないぞ」

「それはないでしょ。お金だけで入学できるのなら、誰も苦勞はしていないって」「ああ、それに魔法とかですぐにバレるだろ」「もしかしたら、ものすごい力をもっているとか?」「そしたらSクラスにも編入しているだろうさ」

興味津津にクラスメイトがこちらを見ながら小声で話している。普通なら聞こえないのだが、訓練された私には良く聞こえていた。

「お前すごいな」

桜が感心したように私をそのルビーのような赤い瞳で見つめながら、うんうんと首を縦に振っていた。

「桜もわかってたんじゃないの?」

「はあ?オレがわかるはずないだろ。目を開けながら寝ただけさ」

「……そう」

「奏もやってみたらどうだ?ほとんどバレることはないぜ」

「遠慮しとく」

まさか本当に目を開けながら寝てる人間が現実にいるとは、まだまだ私は世界の広さを実感していないようだ。

「おい、何かオレのこと馬鹿にしていないか?」

「気のせいなんじゃない?」

睨んでくる桜を受け流しつつ、今日の授業は滞りなく進んでいく。

キーンコーン……。

「はい、じゃあ次の授業のときは、25ページからです」

午前中の授業が終わり、昼休みになった。

「おっしゃ！今日も売店という名の戦場に行くぜ！！」

桜はそう叫ぶと、「うおおおおおおお！！」と吠えながら教室を後に行った。その光景に誰も突っ込まない。

私は食堂で食べるとしよう。

校舎の食堂は一階にあり、第一、第二、第三食堂まである。多すぎる気もしないではないが、皇総合魔法学園は全寮制なので、ほとんどの学生が弁当を持ってきていない。なので、売店や食堂が混雑するのだ。

料理ができる私は弁当を作ってくればいいのだが、生憎まだ弁当

箱を買っていない。弁当箱を買つまでは食堂にお世話になるとしよう。

私が教室を出ると、出会い頭に軽い何かにぶつかった。

「きゃっ」

その声の人だと判断すると、慌ててその人の腕を掴んで自分の体に引き寄せた。相手がバランスを崩していたので、優しく抱きしめて支えてあげる。ふんわりと柔らかかそうな茶髪が、きらきらと空を舞う。

「あ、あああああなの!？」

「月上? 丁度良かった」

私の腕の中には顔を真っ赤にしている月上がいた。熱でもあるの?

「く、黒沼さん……近いです!！」

「ああ、ごめんね」

私が月上を解放すると、彼女は右手を胸に当てて深呼吸を繰り返した。

「大丈夫大丈夫、私は普通なんだから……そう、さっきのは同性同士なんだから」

何かブツブツと言っているが、あんまり内容が良く分からない。

とりあえずもう少しかかりそうだったので、再び教室に戻ってタッパを取ってくる。廊下に出ると、まだ月上はブツブツと壁に向かって呟いていた。

「月上？」

「ひゃい!？」

私が肩に手を置くと、幽霊でも見たかのように彼女が驚いた。

「す、すいません。何ですか？」

「これ、昨日はありがとうね。ちゃんと洗っておいたから」

「あ、はい」

私が冷静にタッパを渡すのが良かったのか、月上は落ち着きを取り戻してタッパを受け取る。

「と、早く食堂に行かないと。じゃあね」

「え?ち、ちょっと待ってください!」

食堂に向けて走り出そうとした私を、月上は少し慌てた様子で引き留めた。

「えっと……お昼一緒にどうですか?」

おずおずと上目使いに聞いてくる。その態度は、まるで私が断ると思っているかのようだ。

そんな彼女を安心させるために、私はその頭を優しく撫でる。

「いいよ。食堂でいい?」

「は、はい!」

表情がみるみると、まるで花が咲くかのように微笑んで、力強く頷いた。

「うう、、ちっぴり可愛い。」

精霊魔法とその定義（後書き）

本編で書く機会がないので、少し補足です。

この小説では、日本人なのに様々な色をした髪や瞳がありますが、これは精霊魔法に特化している人のみにおこる現象で、その色によってどの精霊と契約しているのかが解ります。

簡単に言うと、弱点がバレバレと言うことです。

感想・誤字の指摘など待っています。というか、お願いします。

こんな穴だらけの文章を読んでくださり、本当にありがとうございます。

転校生と恋？ ～月上緋乃夜～（前書き）

今回は一段と短いです。

すみません（汗）！！

転校生と恋？ ～月上緋乃夜～

side 月上緋乃夜

「止まってください!!」

いつもと変わらないと思っていたその日、私は綺麗な少女と出会った。そんなに良い出会いとは言えなかったけど。

無造作に首の後ろで束ねられた黒髪は、それでも光沢の輝きを放ち、眼帯と意思の強そうな瞳は、何とも言えない魅力を感じた。

少女は必死に「いやいや、転校生だから!!」と叫んでいたが、数十年に1人ぐらいしか転校生はいないので、私が信じられなかったのも無理はないと思う。

少女を侵入者と勘違いした私に対して、彼女は苦笑しながら手をひらひらさせながら言った。

「あゝ……大丈夫だから、あんまり気にしないで」

その絵になる姿に、一瞬目を奪われた。

カッコいい……。

自然とそう思っていた。はっきり言って、私が見てきたどの男性よりも魅力的に見えたのだ。

勘違いをしてしまったお詫びに高校区間を案内し、女子寮の少女

に宛がわれた部屋の前まで来る。

318号室。うん、覚えた。

「あつ、そういえば名前を聞いてなかったね」

「は、はい。えっと、月上緋乃夜です」

「月上、ね。私は黒沼奏。よろしくね」

黒沼さんはそう言うと、にっこり笑って手を差し出してきた。その笑顔にまた見惚れてしまったが、何とか自我を保ってその手を握る。

「はい。よろしくお願ひします」

（あれ？）

私は黒沼さんの掌の感触に違和感を覚えた。てつきりスベスベした綺麗な掌かと思ったら、少しゴツゴツしているのだ。何か、部活などやっていたのだろうか。

「じゃあね、月上。今日はありがとう」

「い、いえ。こちらこそ……」

その日の夜。

私はベットの中で丸まっていた。

「……寝れない」

時刻は深夜2時。

それでも私の目は最高に冴えていた。何度瞼を閉じても、その裏に映るのはニッコリと微笑む黒沼さんの笑顔だ。

「~~~~~っ!!」

思わず熱くなった顔を、ピンクを基調とした枕に押し付ける。

自分はどうなってしまったのだろうか。黒沼さんの顔が脳裏から離れず、今日一日の会話が頭の中でリピートされている。心臓は早い鼓動を絶えず打ち続け、たびたび赤くなる頬は湯気が出るかと思うほど熱かった。

(こゝ、これってもしかして……恋、とか?)

私は恋愛には疎いが、恋を知らないと言っわけではない。初恋だ

って小学生の時にはしていたし、中学生の時には、数週間だが付き合っていた男性もいた。まあ、手を繋ぐ段階までしかしていないが。

その今までの経験から言って、この胸の高鳴りは恋した時と非常に似ている。しかし、今までにない高鳴りは、どういうことなのだろうか。それに、

「あ、相手は黒沼さん。同性なんだから……。私は普通なの、普通」

私は空が白んでくるまで、ぶつぶつと呟いていた。

それから入学式まで黒沼さんと毎日会っていたが、嬉しいと同時に、少し赤くなった顔をさりげなく隠していたのは、私だけの秘密にしておこう。

転校生と恋？ ～月上緋乃夜～（後書き）

月上って付き合っていた経験あるんだあゝ、と自分で思いました。
あれえゝ？なんでこうなった……。

感想・誤字の指摘など待ってます。

こんな短くてすいません。

これに懲りず、また次回も見えて頂けたら嬉しいです。

禁句と正座（前書き）

本が欲しい。ゲームが欲しい。

でも、金がない。

お金は大切です。一番ではないですが。

禁句と正座

いくら魔法使いと言っても、体力がなくても良いとは限らない。

戦闘は長期戦になる可能性があるし、魔力を使えば疲労感も感じる。なので、体力も何かと重要視されているのだ。

そのため、この学園では体育の授業は毎日のようにある。

体に傷の多い私はクラスメイトの前では着替えられないので、体育館のトイレの個室で学校指定の紺色ジャージに腕を通す。

「……つと、やっぱり狭いな」

苦勞してジャージに着替え、廊下に出て時計を見る。授業開始まで5分を切っていた。急いで更衣室まで制服を運び、整列を始めている生徒たちに合流する。

今日はカリキュラムの説明なのか、体育館には男女共に集合していた。

「よう、奏。遅かったな」

適当に並んでいると、いつの間に後ろにいたのか、桜が肩を軽く叩いてきた。

「お前どこに行ってたんだ？更衣室で居なかったら」

「ん、トイレで着替えてたから」

まさか、体中に傷がたくさんあるとか言える訳がない。

すると何を勘違いしたのか、桜は「にひひっ」と笑い始めた。

「……なにを考えているのか解らないけど、馬鹿にされていることだけは解る」

「いやいや、だって胸が小さいのを気にしているからだろ？くくっ
！」

「なっ!?!」

こ、こいつは今何と言った？

私の中でワースト3に入る、禁句中の禁句を言わなかったか？

「てめえ、そこに座れ！ちょっと胸がでかいからって調子のんなよ
!?!」

「おお！怖い怖い」

桜はおどけたように肩をすくませると、列を離れてスタコラと私から逃げ出した。

「ちよっ、待てえ!」

「あははっ。捕まえてごら〜ん」

「上等だゴラア！すぐに打ん殴ってやっからな!?!」

「おいおい、まるで不良だぞ」

結局、私たちは始業時間になっても体育館を走り回り、体育教師にこっ酷くお説教を貰った。

「ううっ！」

「……」

お説教をありがたく頂戴した私と桜は、正座のまま体育教師の説明を聞くことになった。

「では、どこかの生徒のせいで時間が押しているから、さくさく説明していくぞ」

体育教師はそう言うと、正座している私たちを横目で睨む。もちろん私たちはさっと目をそらした。クスクスとクラスメイトの失笑が聞こえる。

「はあ。まあいい、さっそく説明していくぞ。これは模擬戦闘の力
リキユラムと少し重なっているから、ちゃんと聞いておくように」

この学園は模擬戦闘の授業もしている。と言うか、模擬・魔法練
習場がある時点で予想できることだが。

「体育は基本的に、男女分かれて授業をする。当たり前だな。でも、
2年からはそれとは別に班を構成してもらおう。これは皆知っている
と思うが、学期の始めと終わりにある“皇祭”^{すめみまつひ}の時に出場するメン
バーになるから、班のバランスを考えて組むこと。模擬戦闘の授業
もこの班でやるからな。一応、5人で一つの班とする。じゃあ、班
を組んでくれ」

教師が説明を終えると、生徒たちは急いでメンバーを集めだした。
事前に打ち合わせしていた生徒もいたのか、いくつかすでに5人集
まっている班もある。って。

「ねえ、皇祭ってなに？」

私は横で綺麗に正座している桜に、先程聞いた単語を尋ねてみた。

「はあ？お前そんなことも知らねえのかよ。結構有名なんだぜ」

「え？」

有名？でも私は聞いたことがないし、事前に調べた資料の中には
書いていなかった。外国暮らしだったので、聞いたことがないのは
仕方のないことかもしれないけれど、資料の学校行事欄に記載はな
かったはず。

そんな私の態度に、桜は呆れたようにため息を吐いた。

「マジかよ。じゃあ、説明してやる。皇祭ってのはな、簡単に言う
と“学生同士の模擬戦闘”だ」

「……は？」

戦闘？

「一応中学校のからあるだけだな。生徒同士の意欲向上を目的で
実施されるらしい。基本、一班5人で構成される。各クラスから代
表の一班を選出して、1年から3年までの各クラスの代表がトーナ
メント方式で勝ちあがっていく。まっ、この学校のスポーツみたい
なものだな。勝ったクラスは、何でも学園長にお願いできるらしい
ぞ。限度はあるらしいが」

ええ〜……。そしたら、私もその行事に参加しないといけないわ
け？それって色々まずい気が。それに模擬戦闘のトーナメントって、
どこのファンタジー小説だ。あ、ここか。

「大丈夫だって。そんなに心配しなくてもオレが班を組んでやるよ」

桜が見当はずれなことを言っているが、今はそんなことは無視だ。
これは陰謀が潜んでいる気がする。黒幕は解っているけど。

肩を落としている私に体育教師が近付いてきた。

「お前たちは、班を組まなくていいのか？もうほとんど決まってい
るぞ」

その言葉に周りをみると、確かに大多数が班に別れていた。その中で、3人しか集まっていない女の子たちがいる。

「良かったな。何もしなくても、もう決まっているようだ」

桜が淡々と事実を述べた。

禁句と正座（後書き）

個人的には胸は控えめが好きです。

えっ、どうでもいい？

ですよ〜。

感想・誤字の指摘など待ってます。ってか全然こないっす。

そう甘くはないってことですね。

もっともっと精進します。

しかーし、テストと就職試験が少し重なってしまっているので、次の更新は1、2週間後ぐらいになりそうです。

暇があったら更新します。

こんな駄文を読んでくれまして、ありがとうございます。

メンバーと班長決め（前書き）

本当に久しぶりの更新です。

リハビリついでに書きましたので、いつもの半分ぐらいの量しかありません。

次からは戻ると思います。

メンバーと班長決め

班が決定したことによって正座から解放された私たちは、班ごとに固まるよう指示を受けた。

「うぐっ、足がジンジンする……」

あまり足を組むことに慣れていない私は、ひよこひよこ歩きながらメンバーの所へ向かう。桜はと言うと、いつもと同じ様子でしっかりと地面を踏みしめていた。

「桜は、足痺れていないの？」

「こっに見えても、オレは城道院家だぞ。小さい頃に作法や礼儀とか叩き込まれてんだ。正座ぐらい、何ともないさ」

「おおっ、腐っても城道院家の出身なんだね」

「それはさっきの仕返しだよ？」

私と桜が他の三人の近くまで来るのを見計らって、体育教師が口を開く。

「よし、班ごとに集まったな。その班の中で班長を決めてくれ。決まったら前に置いてある用紙を取りに来い。終わった班は体育館で何かやっというていいぞ」

その言葉で、体育館は一気に騒がしくなる。

「はいはい！やっぱりオレが班長だろ！！」

一番騒がしいのは桜だった。

桜の発言に、セミロングの髪型にしている茶髪の少女が、絶対零度を連想させる冷たい視線で桜を見た。おそらく染めているのだろう。生え際が黒くなっていた。薄く化粧をしており、大学生にも見える程に大人びている。右耳にピアスが三個も付いていた。胸は…私と同じくらい？

「却下。アンタが班長になったら好き勝手やるでしょうが。去年の事を忘れたの？」

「オレは過去を振り返らないのが主義なんだ。大事なのは今だろう！」

「いや、桜。そんな目をそらしながらも、説得力ないから」

「と言うか、今回はアンタたちがやってみれば？去年も班長していなかったでしょ」

茶髪の少女が残りの二人に視線を移したので、それに釣られて私も目をそちらに向けた。

「い、いえ無理ですよ。やっぱり此処は城道院さんしかいませんつて。ねえ？」

「そ、そうですね。何て言っても十二家の一つなんですから！」

慌てた様子で両手を一生懸命に振っている二人の少女は、鏡があるかのように同じ容姿をしている。サイドポニーをそれぞれ左右にしており、それで個性を何とか出している感じだ。小柄な体格をしていて、中学生と言われても違和感はないだろう。二人とも瞳がくりくりしてとても可愛らしい。小動物みたいだ。

『十二家の一つ』の言葉に桜の雰囲気は少し変わったが、私が顔を向けた時には今まで通りの彼女がいた。

メンバーと班長決め（後書き）

登場人物が多い！！

やっぱり見切り発車じゃ駄目ですね。

最終的には何人になるんだろう……自分で解りません。

感想・誤字の指摘など待っています。

読んでくださって、本当にありがとうございます。

Fクラスの外れ者と班長決定（前書き）

自分がどう言う風に書いていたか、忘れてしまいました。

キャラ設定もついでに忘れました。

やっべー（汗）

Fクラスの外れ者と班長決定

騒がしく班長を決めている彼女たちを見て、一つの疑問が浮かび上がった。

その疑問を解消するべく、隣で「オレが班長なんだよ！そこっ、否定すんな！」と叫んでいる桜に体を向ける。

「みんな、去年も同じ班だったの？」

「ん？ああ、班を組む時はいつもこのメンバーだぞ。簡単に言うとこのクラスで浮いている奴らだな」

「……えっ、じゃあ私も？」

「ははっ、残念だったな」

がつくりと肩を落としている私の肩を叩きながら、桜はニヤニヤと笑っていた。何か、むかつく。

「あれ？と言うことは、もう一人いたんじゃないの？一クラス三十人だから、このクラスじゃ一人残るんじゃない……」

再び浮き上がってきた疑問を桜に問いかけてみる。

「いや、このクラスはお前が入っても三十人だ。一年の終わりに一人辞めたんだよ。ひよるひよるな男だったぜ」

「アンタがこき使ったせいで辞めたんじゃないの？」

茶髪の少女が冷めた目で桜を睨む。人のこと言えないけど、目付きわる〜。

「ああ？てめえだつて殴つたり蹴つたりしてたろつが」

「それはあつちが悪いの。私の足とかじろじろ見てくるんだから、それぐらいの代償は当たり前でしょ」

「いや、だからと言って顔の原型が解らなくなるほど殴るのは、さすがのオレでもどうかとおもつぞ」

桜の反論に肩を竦めた少女は、話を元に戻そうと口を開いた。

「で、班長はどうするの？私は前やったし、城道院は論外。やつぱりアンタたちのどつちかでしょ」

「ええ！？じゃ、じゃありリイがやってよ」

「な、何で私なの！？アルエがやっても良いじゃん！！」

「だーかーらっ！オレなのオ・レ！！」

何だか、話が混沌としている気がする。周りはすでにボールで遊び始めているし、体育教師は苛ついている様子でこちらを睨んでいた。おそらく、話し合いが終わっていないのは私たちだけなのだろう。

「オレって言ったらオレなんだ！！」「うるさい」「やはり此処は、城道院さんに任せてみせてはどうですか？一番能力は高いんですか

ら。よっ、日本ー!!」「そうですね。なんなら海老原さんでも良
いんじゃないですか？リーダーシップがありますから。よっ、姉御
!!」「てめえらうるせえ!!」「まったくね。そのウザさが皆から
嫌われているって、分からないの?」「ええ〜!?!」「

「ストップ、ストップストップ!!!」

このままでは終わりそうになかったので、私が無理矢理に班員の
注目を集めた。いきなり大声を出した私に驚いたのか、ぽかんとし
た表情で皆がこっちを見てくる。

「もうジャンケンか多数決でいいじゃない。このままだと授業終わ
っちゃうし、また体育教師に怒られるよ」

「いや、起こられたのはアンタと城道院……」と聞こえたが、そ
んなのは無視。じゃないと話が先に進まない。

私は皆の顔を見て口を開く。

「じゃあ、ジャンケンか多数決かどっちかだけど……」

「ああ、お前がすれば良いんじゃないか?」

ふと桜がこちらを向いて、手を叩いて妙案のように言ってきた。

思いもよらない提案に、一瞬思考がストップしてしまう。

「……は?」

「いや、だって今この場をまとめてんのは奏だろ。だったら奏が班

「長でも良くね？」

私のフリーズ状態を分からないのか、桜は淡々と言葉を吐いて他の班員に聞いた。

「えっ、ちょ」

「まあ、それでもいいかもね。はっきり言うと、私と城道院以外になればそれでいいし」

「ナイス提案です城道院さん！場を仕切っている人は転校生さんですもんね！！」

「そうですね！転校生さんはカリスマもありそうですし、これほど適任な人はいませんよ！！」

私の言葉を遮って、他の三人は口々に桜を肯定する。

「いやいや、何でそう言う結果になるの？おかしくない！？」

もし班長になれば、皇祭と相成って忙しくなるのは目に見えている。そうなれば、ますます護衛の仕事をするのは難しくなってくる。

必死で反論する私に焦れたのか、桜はさらにとんでもないことを言ってきた。

「じゃあ、奏が言ったように多数決で決めようぜ。奏が班長に相応しいと思う奴、手あげる」

すっと全員が手を上げる。って即答かよっ！要領の分かっていな

い転校生を班長にするのかよ!!

「決まりだな。奏、お前が班長だ」

いや、某サイヤ人風に言われても。

釈然としないまま体育教師の方へ歩いていく。用紙とボールペンを受け取り、桜たちのところまで戻った。

「……これ、名前書けて」

「オツケー……そうスねんなって」

用紙の一番上に班長の名前を記入する欄があったので、私が初めに名前を書いた。次に桜、三番目が茶髪の少女だ。

まなへみお
真鍋深緒。

思わず“深緒”の部分に動揺してしまったが、それは表情に出さずに押し殺す。

最後に双子が記入する。

右ポニ、リリィ・S・ルシテイル。

左ポニ、アルエ・S・ルシテイル。

その名前を見て、私はまた桜に疑問を解消させて貰おうと話しかける。

「あの二人って、日本人じゃないの？」

「ああ。って、髪が金髪なんだから分かるだろ？」

「……………」

いや、この現代じゃその法則は使えないから。

Fクラスの外れ者と班長決定（後書き）

クリスマスありましたね〜。

クリスマス……………休日でした。

感想・誤字などの指摘待っています。

このような矛盾だらけの文章を読んで頂き、誠にありがとうございます。
ます。

これに挫けず、次回も読んで頂いたら嬉しいです。

紅色さんと奥さん（前書き）

明けまして、おめでとございます。

今年もよろしく願います。

お正月から投稿です。

紅色さんと奥さん

「紅色さーりーりーんっ!!」

今日、全ての授業が終了した私は、校長室のドアをノックもせず
に開けた。勢い良くドアを開けたにも関わらず、紅色さんは特に反
応もしないで書類に目を通してている。絵になるな。

紅色さんは以前していなかった眼鏡をかけており、ますます中身
と外見のギャップが激しい気がした。

「そんなに急いでどうしたの？廊下を走る音が聞こえてたわよ」

微笑みながら私を上目遣いで見てくる。カッコイイ……じゃな
くて。

私は緩みそうになった顔を引き締め、ペラリと書類を捲っている
紅色さんに詰め寄る。

「なんですか皇祭って!?!私、何も聞いてないんですけど!?!って言
うか、色々調べていたのにそういう情報がなかったんですけど!?!」

「当たり前よ。私と格が意図的に隠していたから」

切羽詰っている私に、さらりと言ったのける男の娘。ん、使い方
が違つかも。

まあ、この二人が情報を操作していることは予想通りだった。が、

「どうしてこんなことをしてんですか？護衛は情報が命なんですよ！」

「面白いから」

「……一言かつー！」

思わず紅色さんのディスクを叩いてしまったが、目の前の女性はニヤニヤと笑っている。

「結構大変だったのよ？資料の改竄とか、ネットのアクセスとかね。いつバレないか冷や冷やしたわ」

「い、いやいや！護衛とかどうするんですか！？問題があるでしょうー！！三十人も守らないといけないのに、皇祭にも出るとか無理ですよー！！」

「大丈夫大丈夫。中学校には私の娘と息子がいるから」

「……は？」

またしても驚愕の新事実。私、この一日で何回驚いているんだろう。

私の呆然としている表情が面白いのか、紅色さんはこちらを指差してゲラゲラ笑っている。いつらー。

「あははははははっ！な、なにそのかお……ちよっ、こっち向かないでっー！ぶっ！や、やばい。腹痛いっ」

「……殴って良いっすか？」

「う、ごめんごめん……ちょっと待って。ぷぷっ」

青筋浮かべながら拳を握り締める私を見て、爆笑していた校長は呼吸を整えるために深呼吸をする。

「すー、はー。すー、はー。すー、はー……オツケー。くっ、で何？」

「オツケーっばくないんですが……子供いたんですか？」

「いるよー。十四歳の娘と十二歳の息子が。」

ええー、その容姿で子持ちですか。しかも二児の。

「でも、まだ子供ですよ？ 護衛ができるんですか？」

そう、十二と十四の年齢は精神的にも不安定で未熟だ。私みたいな境遇ならともかく、才能があってもこの仕事はきつい。

私の不安そうな言葉に、紅色さんは外国人みたいに大袈裟に肩をすくめた。

「私の奥さんの教育方針なの。小さい頃から色んな経験させろってさ。裏の仕事も何回かやっているから、大丈夫と思うわよ」

「裏の仕事、ですか……」

小さい頃から社会の裏側を見ていると言うことか。確かに人生価

値観は大きく変わるだろうが、それはすでに教育とは言えない。

「裏と言っても、比較的簡単な仕事よ。要人の護衛だったり、麻薬の運送だったりね。まあ、それでも戦闘は避けられなかったけど」

私の苦い表情を視界に入れた紅色さんは、フォローをするように言葉を紡いだが、言っている本人も少し悲しげに笑う。それは、きつと当たり前の反応だろう。自分の子供を愛しているならば、あんな世界に進んで放りこもうとはしないだろう。

「紅色さんの奥さんって、一体どういう人なんですか？」

少なくとも、普通の人ではないだろう。人生的にも精神的にも。しかし、その話題を振った瞬間、紅色さんの顔色が変わった。

「聞く？聞く？聞いてちょう？しょうがないなあ、言っちゃおう。綺麗で、強くて、優しく、もう、完っ璧なの！家事は何でも出来ちゃうし、敵は何でも倒しちゃうし、最高って感じ！それに隠密行動にも得意でね。まだ付き合う前のことなんだけど」

「は、はい」

瞳をキラキラさせながら喋り出す紅色さん。その姿は、まるで恋する乙女のような。中身は男何だけど。

「つとと言うか、前半は良いとして後半は奥さんとしてどうなんだろ。特に隠密行動。」

「それでね、二百人いるテロ組織を次々殺して行って、それで笑ってるの！！もう興奮した！！！！！！」

「へ、へえ〜。すごいんですね……」

「ち・な・み・に 奏ちゃんも知っている人よ」

「……」

そんなちょっと可愛い女の子みたいに話しかけられても、全然キ
ュンとしない。だって男だもん。

「もう解んないの？んもう〜。だったら、教えてあげる」

私は何も答えてないのに、目の前女男はさっさと語り出す。

「わ・た・しの奥さんは〜……“レム”っていうの」

.....

.....

.....

.....へ？

「ええええええええー」

「.....」

私の今日一番の叫び声が、夕日が射す校長室に響き渡った。

紅色さんと奥さん（後書き）

今年の抱負は『もっと文章力をつける』ですね。
自分で読み返して、かなり落ち込みます。

こんな未熟なモノを読んで頂き、本当にありがとうございます。
よろしかったら、これかも読んで頂いたらとても嬉しいです。

感想・誤字などの指摘を待っています。

ファイルと紅蒼（前書き）

更新遅くなってすみません（汗）。

ちょっとスランプ気味でした。何偉そうに言ってたって感じですけど。

ファイルと紅蒼

校長室を退出した私は、自分の部屋に戻ってくるなりベットに倒れこんだ。紅色さんから貰ったファイルを横に投げ出し、少しの間だけ目を閉じる。

今日は疲れた。色々予想外なことが多かったし、何より意外な新事実もあった。それに、初めての授業だと言うこともあって疲労感が溜まっているのだらう。ベットの感触が、とてつもなく心地良い。

しかし、このままだと夢の中にダイブしてしまいそうだったので、とりあえず体を起こした。ファイルを再び手に取り、パラパラと目を通す。ファイルには、真鍋深緒、リレイ・S・ルシテイル、アルエ・S・ルシテイルの情報が載っていた。誕生日、年齢、身長、体重、血液型、スリーサイズ、好きな食べ物なども記載されている。

真鍋深緒

ただの平凡な家に誕生する。六歳の時に、魔法使いとしての才能に目覚めた。魔法使いとは程遠い家庭だったため、とても喜ばれられない。中学受験で皇総合魔法学園に入学。成績トップで合格したため、当時は秀才だと期待されていたが、言動の荒さと成績不良で問題となる。中学一年生の頃はA組だったが、二年生からはFクラスに転落した。以後、Fクラスを維持している。

リレイ・S・ルシテイル（姉）、およびアルエ・S・ルシテイル（妹）。

日本人とアメリカ人のハーフ。八歳の誕生日に親が離婚し、アメ

リカ人の母に親権があると言うことで母親についていく。その年末に発熱し、魔法使いの才能が目覚める。片親だったが、母方は裕福な家庭だったために生活に困ることはないと考えられる。中学受験で皇総合学園に入学したが、中学二年生時にレズ姉妹と言う噂が流れた。それ以来、深い友人関係はないと考えられる。

最後のページを読み終わると、ファイルは蒼い炎に包まれる。不思議と炎に触れても熱くはなく、まるで色のついた空気を触っているみたいだ。炎はファイルだけを焼き、どんどん原形を焼失していく。もう持つ所が端っこしかなかったので、適当に投げ捨てると、ファイルは地面に付くことなく消え去った。

この炎は機密性の高い文書などに用いられる魔法で、対象者がその文書全てに目を通したら消滅するようになっていた。一瞬でも集中力が途切れると覚えられないので、中々面倒な魔法だ。私の場合、コツをつかめばすぐに覚えられるようになったが。

もう一回横になりたかったが、お腹がすいてきたので何か作ろう。たまに自炊するのも悪くはない。

勢い良く起き上がり、可能な限り眠気をなくす。小さめの冷蔵庫を開けて中を確認したが、生憎食材は少なかった。って、牛乳しかないし。

今から買いに行くのも面倒くさかったので、今日は食堂を利用しよう。いつもなら月上と一緒にのだが、彼女は委員会が忙しいらしい。

財布を手に取り、部屋を出ようとする。と、玄関の向こう側から気配を感知した。敵意がないので、取り合えず聴覚を強化してみる。

「ちょっとお姉ちゃん……止めようよ」

「何言ってるの？気になるじゃない。あのお父さんがあれだけ絶賛するんだから、そうとう強い男に違いないわ」

「えっ？ここ女子りよ」

「グダグダ言っていないで、開けるわよ」

少し甲高い声と共にドアノブがガチャリと回り、爆発でもあったのかと疑う程の音をたててドアが動いた。ちよっ、留め具がすごい不協和音を醸し出しているんですけど！

身体強化の魔法を解き、私は廊下に立っている人たちを見た。

蒼い髪の男の子と、紅い髪の女の子がそこにいた。中等部の子なのだろう。詰襟とセーラー服を着ている。どちらも顔の造形が整っており、特に男の子は中性的な顔だちだ。

私が冷静に二人を見詰めていると、ドアを開けたであろうツインテールの女の子が金魚みたいに口をパクパク開いている。なぜ？

「な、ななななななななななっ！何でこんな所に女がいるのよ！はっ、もしかして護衛ってとんでもない色狂いなの！？」

「い、いや……だからお姉ちゃん」

「……はあ」

何かは良く解らないが、女の子はとんでもない勘違いをしているみたいだ。勝気そうな顔を真っ赤にさせて、あわあわと両手を動かしている。気弱そうな男の子はそんな女の子を落ち着かせようと、おろおろして説明しようとしていた。なにこの二人。超可愛いんですけど。

「だ、だからねお姉ちゃん。ここは女子寮なんだって」

「だってお父さんは強い護衛の人って言ってたじゃない!? 強いと言えば男でしょ! それともお父さんが嘘ついていたの?」

「どんな偏見なのさ。家もお母さんの方が強いでしょ? それに、お父さんが昨日女の子って言ってたよ」

「そんなことないわ! だって……」

「はいはい。ちょっと待って」

廊下に響く声に生徒が集まり出したため、これ以上余計な事を喋る前に二人の会話に入る。女の子は私をキッと睨み、男の子は申し訳なさそうに軽く会釈した。

「これ以上はその話はマズいよ。続きは私の部屋で話そうか」

二人だけに聞こえるように声量を落とし、出来るだけ柔らかかな表情で私は囁いた。

ファイルと紅蒼（後書き）

良く日間ランキングで「処女作ですが」とあらすじに書いてあります。

……。

うらやましいぞコンチクショー！！！！！！！！！！

でもお気に入り登録する私。だって面白いんだから仕方ありません。当分の目標は日間ランキング100位ですね。

感想・誤字の指摘など待っています。

こんなに更新が遅いのに見てくださって、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6199y/>

最弱な魔法使い

2012年1月11日19時55分発行